

「男女別学の時代と女学校文化」



京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業などを行う「京まなびミーティング」。
16回目となる今回は、稲垣 恭子委員が、「男女別学の時代と女学校文化」をテーマに講演をされました。京都の歴史や学校史に関心をお持ちの方など多数参加され、皆さん熱心に聴き入っていました。

日時：平成28年9月4日（日） 14時～15時30分

場所：京都市学校歴史博物館

講師：稲垣 恭子 委員（京都大学大学院教育学研究科教授）

講演は、「京まなびネット」
「動画で学ぶ」コーナーで
視聴できるよ。



〇はじめに

私は京都大学の教育学研究科で教育社会学を担当しています。女学生文化や師弟関係の文化など、教育を支えている文化を歴史的な視点を入れていろいろな角度から研究をしています。

現在の学校教育において、男女共学はほとんど当たり前になっており、改めて男女共学とは何かを問うまでもない感じになっていると思います。もちろん、高校でも男子校・女子校もありますし、高等教育機関では「女子大学」という名であくまでも頑張っておられる大学もあるわけですが、基本的には共学が主軸で、選択肢として別学もある、というのが現状だと思います。



京都では2000年以降、これまで別学だった私立高校でも共学化が進んでいますが、そういう中で近年、別学の意味を再評価しようという議論もあります。私の教育社会学のゼミでも、男子学生・男子院生がいるのですが、男子校出身者同士というのはお互い匂いで分かるらしいです。お互いどこと言わなくてもなんとなく「あいつ男子校くさいと思ったらやっぱり」という感じです。共学とは違う独特の文化があって、それが出身者にはなんとなく分かる、言語化できないけれど何かあるようです。

今日は、共学化の時代を裏で支えてきた別学の文化をみていくことで、現代の共学・別学問題を考えるヒントになればと考えています。

〇男女共学制の出発

高校で男女共学が制度として実施される新制高校がスタートするのは1948年（昭和23年）です。その柱の1つとして議論されたのが男女共学制でした。戦前期は、東北帝大等に女子学生が若干いましたが、基本的には別学でした。ですから、戦後、共学には期待もありましたが、同時に戸惑いや不安もありました。実際、高校では、共学にするかは各学校の状況や地域住民の意見を聞きながら決める自由裁量に任せられていました。多くの地域では、アメリカ占領軍の軍政部の主導で共学化が進みましたが、東京以外の関東地域の埼玉・群馬・千葉・茨城と東北の各県では、軍政部が比較的寛大な措置をとり、公立高校でも別学が長く維持されました。

全国的な傾向では、1954年には、通常課程で63%、定時制を合わせると70%が共学になっています。ただし、京都のように一斉に男女共学になったところと、逆に70%ぐらいが別学というところもあり、地域によって違っていました。

表1 1954年度の共学・男女別高校数 (校)

学校種別	通常の課程		定時制の課程	
	本校 (%)	分校 (%)	本校 (%)	分校 (%)
学校数計	2,859(100)	3(100)	1,834(100)	1,336(100)
共学校	1,819(63.62)	1(33.33)	1,452(79.17)	1,194(89.37)
男子校	434(15.18)	1(33.33)	274(14.94)	47(3.52)
女子校	595(20.81)	1(33.33)	77(4.20)	94(7.04)
不明	11(0.39)		31(1.69)	1(0.07)

(出典：橋本紀子『男女共学制の史的研究』大月書店1992年 P.365)

中でも群馬県は別学率がかなり高く、公立高校の60%以上が別学でした。最近でも、公立高校の中で別学率が一番高いのは群馬県です。この群馬県で象徴的な事件がありました。

○大久保清事件と男女別学問題

1971年に群馬県で通称「大久保清事件」という連続女性誘拐殺人事件が起きました。大久保清という当時36歳の男性が、若い女性8人を殺害した事件です。「ドライブに行きませんか」などと、約150人に声をかけ、少なくとも30人は応じたそうです。8人中3人が高校生であったため、各高校で調査すると、声をかけられ誘いにのった生徒がかなりの数に上っていることが分かり、学校関係や教育界にショックを与えました。各学校では、外出時には制服を着用し、短いパンツ、ミニスカートは規制するなどの対応をしていましたが、それにとどまらず男女別学問題にまで議論が及ぶことになりました。

当時、群馬県の公立の普通高校は35校あり、そのうち共学は10校だけで、16校は女子校でした。それまで、親の間でも「共学になると風紀が乱れる」「女子には男子並みの勉強は必要ない」という考えもあり、別学に反対というわけではなかったのですが、この事件後、群馬県の高教組では「服装などの制限よりも、男女共学別学の問題、別学によって男女の交流が日常行われていないことに問題がある」という議論が出てきて、「共学を普及させる」ということを決議しました。

群馬県でこういう議論が起こったことから、共学が戦後教育の象徴であったことと同時に、「別学が時代に逆行している」というマイナスイメージが教育界にあったことがうかがえます。

○男女共学化と別学ニーズ

一方、京都では公立高校の共学化は1948年に始まり、早い時期に進んでいきました。共学は、小学区制・総合制と並んで高校三原則の重要な柱の一つでした。しかし、現実には共学への批判や不満もありました。

一つ目は、男子と女子が、同じカリキュラムで大丈夫かという学力差の問題です。戦前のカリキュラ

ムや進路の違いから、共学になると女子がついていけないのではないかという懸念がありましたが、実際には女子が落ちこぼれる事実が問題になることはなく、不安は解消していくことになりました。二つ目は、共学になることで風紀が乱れるという懸念です。高校ではこれに対して健全な男女交際という形で対応しようとしていました。三つ目は、男女は持っている資質が違うのに、同じように扱おうと女らしさや男らしさという特性がなくなるという批判です。男女の特性がそもそも違うことを前提にして話をしていく、一般にこれを男女特性論といいます。それを前提にしたとしても、何が女らしさ・男らしさを特定するのは難しく、ましてや共学別学がどう影響するのかを証明するのは非常に難しいことです。



〈フォークダンス 1962年 京都市立高校〉

○別学ニーズの受け皿としての私立

こういった不安や批判の受け皿になったのが私立の別学でした。1954年、55年の京都市内の私立高校は、同志社高校を除いて基本的に別学でした。公立は全て共学化しましたが、1960年では女子の7割は女子校に通っていましたが、その後は私学率が低くなっていきますが、90年でも女子の54%、男子も50%が私学に通っていました。50年代、60年代は、高校進学率全体が増加していく時代ですから、私学の増加という側面もあり、別学で育った生徒が多いのは事実でした。

京都市内の全日制高校の生徒数

年	男子			女子		
	公立(人)	私立(人)	私学率(%)	公立(人)	私立(人)	私学率(%)
1950	10,810	4,797	30.7	6,199	5,859	48.6
1955	12,428	6,341	33.8	7,015	9,786	58.2
1960	12,835	11,099	46.4	7,119	17,646	71.3
1965	17,034	16,893	49.8	10,284	26,822	72.3
1970	10,846	12,348	53.2	8,703	16,248	65.1
1975	10,353	12,252	54.2	8,916	16,968	65.6
1980	12,598	12,698	50.2	11,600	17,632	60.3
1985	14,784	14,229	49.0	13,788	17,570	56.0
1990	16,453	17,053	50.9	16,035	18,928	54.1

(各年度の『京都市統計書』等より作成)

新制高校と共学は、戦後の民主主義的な教育を体現するものとして、期待の的でしたが、一方では共学に対する不安や批判もあり、その受皿になったのが別学の私学でした。共学への不安を吸収する形で別学のメリットを打ち出す背景には、それまでの戦前の別学を支えてきた学校や教育に対する社会的信頼がありました。

1950年代、60年代に高校生になった人達の親の世代は戦前の教育を受け、それが良かったと思っている人が多いです。基本的な信頼があることと、「良妻賢母教育」を理念とする女子の特性を活かした教育だから安心という側面もありました。また、学校によって校風や生徒の雰囲気の特徴がありました。

例えば、公立の京都府立第一高等女学校は、今の鴨沂高校ですが、一番歴史のある伝統校で、勉強もスポーツもできるという高いプライドを卒業生の方たちは持っておられます。市立の堀川高等女学校、今は堀川高校になっていますが、当時は地元の商家の比重が多く、勉強や成績だけではなく、稽古事や音楽美術などを楽しむ雰囲気があったと言われます。同志社女学校や平安女学校などのキリスト教系の学校では英語が非常に強いというモダンなイメージ、京都女学校は規律正しくて真面目な生徒が多いといったように、これらが地域や一般の人たちの学校に対する期待や信頼感に繋がっていきました。

○校風とチャーター

このような社会的な期待や信頼感のことを社会学では、「社会的チャーター」と呼んでいます。

「社会的チャーター」とは、個人を超えて校風イメージと結びついた信頼（「この学校の生徒なら・・・」）のことをいうよ。



戦前の女子教育では、高等教育機関としての女学校を卒業し、さらに女子専門学校や女子高等師範学校などに進学していく人はほとんどおらず、実質的には女学校が女子の最終の教育機関でした。従って、女学校の持つイメージが社会的チャーターとして機能していました。戦後、公立の女学校は、新制高校として共学の中で再出発していきますが、元々女学校としてのチャーターもあり、プライドも持っている生徒・卒業生は、共学になることに抵抗もありま

した。一方、私立の女学校は、それまでのチャーターを戦後も持続し、別学ニーズの受皿になり、私学の経営戦略にもなっていました。

学校を選ぶ時、男子校の場合は、偏差値や進学実績で見ることが多いですが、女子校に関しては、校風、イメージが重要でした。1970年代までは高等学校・短大の進学率が増え、卒業後、職業経験を経て、結婚して家庭に入る、というのが女子の一般的なコースになっていましたから、女子特性を戦略とする私学の別学が結びついてチャーターとして機能していました。こういう形で別学の教育が「専業主婦」と「働く夫」という性別役割分業の社会を支えていったという面もありました。



〈仮装行列「学生に関する十二音」、1954年、京都市内私立女子高校〉

○別学をめぐる言説の変化

こうして共学と、別学ニーズに答える私学という二本立てが進行していきましたが、近年、多くの学校が共学になり、共学が当たり前になってくる中で、共学が男女平等で、別学が特性教育に應じる、と分けて考えるだけでは現状に合わないのではないかと、という新しい別学論が出てきています。

一つは、共学であることが必ずしも教育や職業達成の上で平等を促進させることに寄与するとは限らないというものです。むしろ見えにくい形で男女特性に応じた社会化が行われている面があるという指摘です。例えば、90年頃に問題にされた、男女別の名簿で男子が先で女子は後など「隠れたカリキュラム」、つまり表向きは平等だけど、無意識に男女特性に応じた教育をしているのではないかというものです。そういう見方は、共学が広がっていく中で、共学だからこそ棲み分けるのではないかとされるようになってきました。

男子にはリーダーシップを求めるけれども、女子にはフォローを期待するとか、なんとなく誘導していくことを「隠れたカリキュラム」というよ。



逆に、別学の方が女子にとってプラスの面もあるという指摘も出てきます。共学では、男子がリーダー的な役割を取って、女子がサポートすることが多いのに対して、女子校は女子しかいないので、必ずリーダーの役を取る女子が出てくるし、力仕事も女子がやります。評論家の辛酸なめ子さんは女子校出身で『女子校育ち』という新書を出し、その中で「女子だけで力仕事もやるからタフになる」「男子の目を意識しないから自分の野生を發揮してのびのびと過ごすことができる」「男子の目を意識して行動できないという点では、女子力が磨かれなかったから、社会に出て損をすることが多いかもしれないが、異性の存在を意識しないから、女の敵は女ではないという見方も育った」という面を積極的に評価しています。女子しかいないから、異性ではなくて同性に憧れたり、素直に良いところを認めたり、女性同士の絆など良い関係を大事にするそうです。

男子校の人は男子校同士の匂いがあると言いましたけれども、辛酸さんは、レディー・ガガさんについて、「なんかこの人同じ匂いがすると思っていたら、やっぱり女子校だった」というふうに納得したそうです。それから、オノ・ヨーコさん、YOUさん、中村うさぎさんなども女子校出身らしいですが、その共通点は、男性目線の意識ではなくて、女性目線の意識で活動しているところだと言っています。

別学が女子特性という拘束から自由になる場になっているというのは、それまでの、別学は女子特性を伸ばせるという意味で社会的信頼を得てきたという別学肯定論とは別の形の、逆の意味での評価が新しく現れてきているということであり、面白い視点です。

こうした新しい別学に対する議論を念頭において、女子の教育・別学を見直すと、戦前の女学校文化についても、これまで考えてきたような、制度の変化による「別学から共学へ」とか、「良妻賢母主義の教育」だけではない、少し違った文化の側面があったのではないかと考えてくるわけです。

○女学校文化の再発見

1899年（明治32年）に「高等女学校令」が出され、高等女学校が制度として出発し、戦後の1947年まで続きました。女学校の教育理念は、「良

妻賢母教育」が柱になっていました。戦前は、女学校を卒業したら結婚して家庭に入るのが、お決まりのコースになっていましたから、女学校の教育は、家庭婦人になることを想定して、科学的で合理的な家庭運営や育児に必要な知識や技能を身につけることが目的でした。このほか、国語や数学、理科など、一般の学科を通して教養を身につけることも目的とされていました。カリキュラムや授業時間の配分を見ても、実用的な裁縫、家事に時間を多くとっており、文学や芸術を含む人文的な教養やスポーツ、工芸などを多彩に盛り込んだ教育が行われていましたが、その目的は人格の涵養といったものでした。また、学校や地域に裁量があり、例えばキリスト教系の女学校では英語や音楽に重点をおき、地方の公立の女学校では国語やスポーツ、特に水泳に力を入れる、実科女学校では、家事裁縫などの実用科目を重視するなど、学校によって違っていました。

しかし、学校では良妻賢母主義を掲げていても、生徒たちはそのために勉強をし、生活をしているだけではなく、むしろ、自分たちの今を楽しむという、女学生同士の独自の文化、今風に言えばサブカルチャーができていきます。



〈『男女共修 家庭一般 資料』1970年代、京都教育大学家庭科教育井上えり子研究室蔵〉

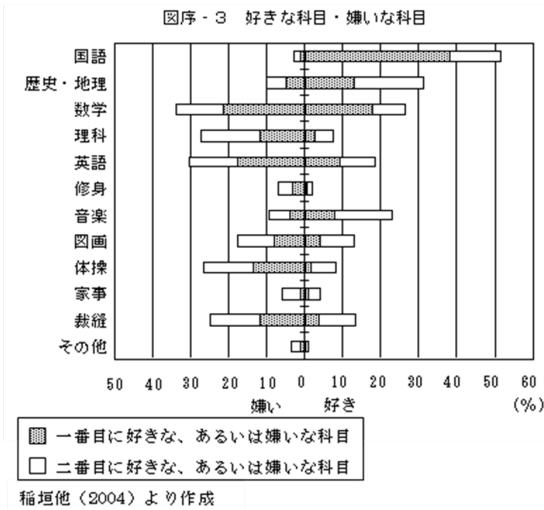
○女学校の生活と文化

女子の場合は男子と違い、女学校への進学が職業や出世に結びつくことはありませんでした。女学校を卒業してから、職業につく職業婦人や、上級学校に進学する人もいましたが、ほとんどは卒業したら結婚して家庭に入るというコースでした。

女学校の数が増えていくのは、大正期以降です。カリキュラムや理念は「良妻賢母主義」ですが、必ずしもそれが女学校に行きたい人たちのインセンティブではありませんでした。家にいて家事の手伝いをさせられるよりも、女学校に行って友達とおしゃべりしたり手紙を書いたり、勉強することの方が楽しかったということが現実としてありました。私は女学校の卒業生にいろいろなことを聞きましたが、

ほとんどの人が「女学校時代が人生の中で一番楽しかった」とおっしゃっていたことが非常に印象的でした。

ここで、そういう生活を支えていた文化や具体的な生活について紹介します。女学生が一番好きな科目は国語でした。生徒のタイプや、校風、地域によって違いがありましたが、単純化していえば、国語好きと家事裁縫嫌いという傾向がありました。この国語好きとは、基本的には文学・小説好きということです。



○読書と理想の世界

女学生は、主に純文学、日本近代文学、外国文学と少女小説を読んでいました。文学少女という言葉は、今はあまり使われなくなりましたが、戦前期には文学好きの女学生の文化を象徴して、文学



少女というイメージが作られました。好きな本として、夏目漱石、樋口一葉などの近代文学、少女小説の人気作家、吉屋信子さんの花物語、翻訳ものの小説があります。『少女倶楽部』、『少女の友』、『少女画報』などの雑誌も人気がありました。特に人気があったのが、『少女画報』に掲載された作家、吉屋信子さんの『花物語』という小説です。中でも、中原淳一さんの絵が入ったものが大人気で、今も復刊されています。

その中の『白百合』という新任の葉山先生と女学生

ある時、舎監に「葉山先生のお家に遊びに行く」と嘘をついて、友達と二人で隣町まで出かけました。帰りが遅くなり、舎監が葉山先生に問合せをします。その時の先生の返答が「二人を帰すのが遅くなり、ごめんなさい」というものでした。二人は嘘をついたことを恥じるのですが、先生は「偽りの証明をたてたけれど、私はそれを悔いていません。可愛い少女を小さな罪の名のもとに豊かな前途を誤らせずにおきましたから」「私のこの心を長く忘れないで。魂の純潔、行為の純潔を私に誓ってください。私の大好きな白百合の花言葉の純潔をお互いに守りましょう」と言うのです。純潔というのは、美しいものを感じ取ってそれを大切にする感性、ピュアな魂のことを言っています。舎監や親という管理者の目から遮断された世界で、お互いを大切に思いながら自分たちの独自の文化を守っていくというのが、女学生文化を内側から支えるものだったということが、この話から感じ取れます。

葉山先生と女学生の関係は、先生と生徒の上下関係というよりも、姉妹のような関係として描かれています。実際に女学校では、上級生と下級生の間に Sister の頭文字を取った「S」と言われる関係、「今日こんな本を読んでこんなふうに思ったわ」とか、「あの先生はこう言ったけど私はそうは思わないわ」とか、いろいろな日常のことを書いた手紙のやり取りなどをする友人関係がありました。

女学生にとって女学校時代は、娘という役割からも解放されて、妻・母親という役割からも保留される、大切に自由な時空間だったことが伺えます。学校の教育理念からも社会の通念からも守られた独特のサブカルチャーを生み出すことで、自分たちの感性の世界が共有されていったことが女学生文化の魅力でした。こうした女学生の読書や文化の特徴は、男子の教養主義とは性質の違ったものだと考えられます。



吉屋信子『花物語』(1939)表紙(中原淳一挿絵)

○男子の教養・女子の教養

大正以降、戦前の旧制高校を中心に広がっていった文化が、教養主義と一般に呼ばれています。その拠点になったのが、現在の東大の駒場にあった第一高等学校です。新渡戸稲造が第一高等学校の校長になったのをきっかけに、それまで学生文化といっても非常にマッチョなバンカラ主義だったのに対して、それでは西洋と伍していく紳士の教育にはならないということで、哲学・思想文学などの読書を通して、内面を形成し、人生を考えようという雰囲気が生まれてきました。

当時、学生の間では「デカンショ節」が流行りました。読書三昧の生活をしながら、学生生活を謳歌することを、半分揶揄した詩です。

デカルト、カント、ショーペンハウエルを
縮めて「デカンショ節」だよ。
「デカンショ デカンショで半年暮らす〜♪
後の半年寝て暮らす〜♪」という詩だよ。



読んでいた本として必ず出てくるのが、阿部次郎の『三太郎の日記』や、西田幾多郎の『善の研究』、倉田百三の『出家とその弟子』などです。西田先生の京大での授業について学生は「内容はよくわからなかった。でも素晴らしい」と言っていましたし、旧制高校を出て帝大に行く学生であれば『善の研究』は読まなければならない本でした。教養主義的な読書とは、自分に対しても人に対しても、教養があるのだという権威を示す側面があったことも否定できません。そういう意味では、男同士の世界で生まれた文化で、それを支えている正当性みたいなものをテコにした文化でした。読まなければならない本を読み、正当な教養を身につけるといって固い教養の考え方でした。

○たしなみとしての教養

ところが、女学生の読書や教養は、旧制高校的な教養主義と違い、楽しみ味わうことを重視するたしなみとしての教養でした。岩波書店から出てくる新書や文庫は、出てくると中を見ないでパッと買う、興味があろうがなかろうが、読むか読まないかは別として本棚に並べて置くといった、物量主義的で、権威主義的なものとは違いました。

女学生の文化は、男子の教養主義を前提にしてみると、一段レベルの低いもののように見られがちです。しかし、女学生の世界ではそういう評価を気にするわけでもなく、少女同士の感性の絆を作っていく媒体として機能し、これが独特の自由で自分たちの持つ世界を共有していく支えになったことが魅力だったと考えています。そういう意味では、教養文化と同時に稽古事に代表されるたしなみ文化、大衆的な少女小説を含む大衆モダン文化、これを全て楽しんでいくという文化のあり方だったのではないかと思いますし、柔軟な女学生文化が出てきた背景ではないかと思っています。

○共学・別学論のゆくえ

現在は男女共学が一般化し、女子の職業キャリアの道もずいぶん開かれるようになってきていますが、そうした中で、共学別学の意味が改めて問われるようになっていきます。

近年の共学・別学論では、制度的に共学になり、男子と女子が一緒にいるというだけでは、平等な教育の実現や平等な価値観の形成につながるわけではない、「隠れたカリキュラム」が存在しているということが意識されるようになってきました。集団で物事を決定する役割は男子で、女子はそれをサポートするということが日常化するなどです。では、女子がリーダーの役割を取るようにすればそれでいいのかというと、これもまたひっくり返ただけで、同じことになります。リーダーの役割を取ることが中心にあって、それが権威や、正しさの象徴だという前提が取り払われない限り、男らしい女性になれということと同じなわけです。それもまた不自由ですし、価値観が男子のようになりたいというコンプレックスの方が、むしろ強くなってしまいう可能性もあります。

女子だけではありません。ジェンダー問題は、今や男子問題として議論されることが多くなっています。「草食系男子」という言葉を作った深澤真紀さんは、「支配的でなくてガツガツしない優しい男子は付き合いやすい」という、ポジティブなイメージで使ったところ、だんだん消極的でやる気のない男子というイメージで使われるようになったと言います。

「草食系男子」という言葉は、
元は逆の意味だったんだね。



決断力、闘争力、力強さといった価値が、男性性と結びついたイメージで語られると、草食系はひ弱でダメな感じに結びついてしまうかもしれません。

「男の子なんだから」と励まされたりすると、そういうことが苦手な男子にとっては、生きづらいことになります。しかも、そういう男性性を持った女子や、肉食系女子がライバルとして参入してくると、自分の地位が奪われ、一番下になるかもしれない。そうすると支配的な男性性を前提にした男同士の絆から排除され、女子からもかえりみられない。そうした男子の生きづらさというものが、男子問題として浮上しつつあると思います。

このようなことを考えると、男子校・女子校の居心地の良さや、生きづらさも、その価値を支えている根底から改めて見直していく必要があるのではないかと思います。男子校出身者が同じ匂いがして居心地がいいみたいなどころがあるといいましたが、これは、かつての権威主義的な男同士の絆とは違って、草食系男子同士の新しい男同士の絆なのかもしれないともあります。共学と別学どちらがいいのか、という議論では十分ではなく、日常生活の中で自分と他者の関係に非常にセンシティブになって振り返るといった営みが、新しい文化を作っていくのではないかと思います。

